

第20回 六条本圀寺はどこへ

■ 本圀寺の故地

大宮花屋町の北東の一角には、旧淳風小学校があります。第17回では、隣接する旧下京図書館の建物について、すこしだけ紹介しました。今回は、ここを起点に、六条本圀寺の栄華の跡を辿りましょう。第17回の後半で紹介した地域の東側です。

花屋町一筋北の旧淳風小学校の北側に沿ったところに、「南無妙法蓮華経」の題目碑があります。これは、六条本圀寺西門の跡。この碑から東方を望むと門が見えますが、これはかつての本圀寺仁王門の跡。現在は、門のある土塀の東側は、西本願寺の駐車場と聞法会館（宿泊施設）があるのみ。もはや仁王門もなく、さらには本圀寺の伽藍の跡形もありません。北側は、京都東急ホテルになっています。

車が止まっているところがわずかだけ、というただっ広い駐車場を眺めると、つい半世紀前までは、ここに本圀寺があったことが信じられない風景です。しかも、今は西本願寺の駐車場。本圀寺のホームページには、山科移転（昭和四六年（一九六一年）の前後の様子を

時を経て本寺末寺の解体、敗戦による農地改革、寺所の散失などの時運に抗し難く、護山の不詳も相まって山門



本圀寺題目碑



本圀寺題目碑から東方を望む

の衰勢その極みに達する（傍点は筆者）

<http://butuzou.com/honkokuji/standard/history.html>

と記してあります。内情は詳しくはわかりませんが、大きな組織が、最後には内側から崩れてしまったことに對する残念さがあふれた説明文です。

■ 江戸時代以前の六条本圀寺

本圀寺（本シリーズでは、年代によって区別するのがややこしいので、本國寺と表記してありますが、この回では本國寺または本圀寺と表記します）は、日蓮宗（法華宗）。現在山科区御陵大岩に移転していますが、昭和四六年（一九六一年）までは、この地に伽藍を構えていました。

室町時代の始まるうとする南北朝時代、貞和元年（一三四五）。本國土妙寺を鎌倉より京都六条に移転し、本國寺と改めたのが最初です。この移転には、室町幕府を始めた足利尊氏が絡んでいま

町名看板の所在（旧本圀寺付近・五条通より南）



す。のちに南朝として対立する後醍醐天皇の勅願寺は日蓮宗妙顕寺でしたが、これと対抗するために、本國寺を京都に移転させ、尊氏の擁立した光明天皇（北朝）の勅願寺としました。寺伝によれば、祖師堂建設には足利尊氏・義詮の用材寄進、客殿・五重塔は足利義満の用材寄進によるとされています。日蓮宗（法華宗）は京都の町衆を中心に広がり、室町時代半ば（一五世紀の後半）には、本國寺をふくむ二一箇寺の本山を数えるまでに強大になりました。

室町時代の後半には、町の自治と自衛のために武装し、天台宗と対立しました。天台宗山門と六角氏（近江の守護）らが同盟して、京都の二一本山を焼き討ちしたのが天文法華の乱（天文五年〔一五三六〕）。焼失した本國寺は、一時京都を離れますが、天文一六年〔一五四七〕に京都に戻りました。わかりやすい解説が、京都ワールドミュージアム（京都市歴史資料館）の人名・寺社・事項一覧 http://www.city.kyoto.jp/somu/rekishu_fm/fm/index/zikou_frame.html の中にあります（都市史解説シート一五「天文法華の乱」）。

永禄一二年（一五六九）には、本國寺の変。織田信長に奉じられて入浴した足利義昭（天文六年〔一五三七〕）慶長二年（一五九七）は、本國寺に仮御所をおきました。信長が国元に帰った隙をついて、三好三人衆が襲撃した事件が、本國寺の変です。

足利義昭は室町幕府を再興したといいますが、実際には信長の傀儡の立場におかれたので、これに不満をもち、のちに織田信長と対立。天正一〇年（一五八二）本能寺の変で、織田信長死亡。足利義昭はこのあとも生き抜き、豊臣秀吉のお伽衆として天寿を全うしたのは、凡庸ではできないこと。平安から鎌倉時代へ移行

するときにあらわれた後白河法皇と共通点がありますね(第12回参照)。時代が転換するときには、権謀術数も必要ということでしょう。

本國寺は、二〇〇九年のNHK大河ドラマの『天地人』の主人公直江兼継の関連でいえば、天正二四年(一五八六)、上杉景勝と家臣直江兼継が、豊臣秀吉と会見するために上洛した際に、本國寺が宿舎となつていました。ただし、ドラマのエピソードは唾もの。

本國寺の系統は、六条門流と呼ばれ、日蓮宗の中でも重要な地位を占めるようになります。熱心な日蓮宗信者であった加藤清正の庇護を受けたあと、貞享二年(一六八五)、徳川光圀(一六二八〜一七〇一)より圀を一字を贈られ、本圀寺となります。加藤清正は、国元の肥後(熊本県)にも、日蓮宗六条門流の本妙寺を開き、大本山本圀寺から「六条門流九州総導師」の寺格を与えられています。

■ 六条本圀寺の盛衰

本圀寺は、天明の大火(天明八年(一七八八年))で類焼してしましますが、その直前の本圀寺の有様は、秋里籬島『都名所図会』巻之二「本圀寺」の図(西南方向からの俯瞰図)から窺うことができます。この俯瞰図では、本堂の東に、五重塔があることが目を引きます。仁王門が西面しているのに本堂が南面しているのは、西本願寺建立にあたって南の地域を譲渡する前は、七条に南門があったことの名残でしょう。左手奥には、「人丸社」

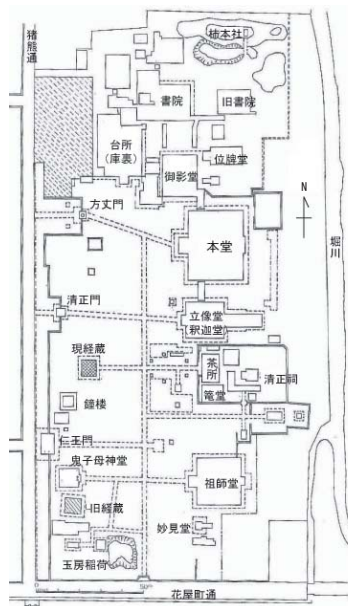
と「立像堂」が描かれています。図右下隅の堀のそばに建っている四方流れ(方形造)の建物は「経蔵」で、天明の大火に唯一焼け残った建物です。大火後に、清正門の南に移築されたのち、さらに山科へ本圀寺が移ったときに移築されました(重要文化財)。『都名所図会』の説明の中には、「本堂」「立像堂」「祖師堂」「刹堂」「方丈」「人麿社」「皇諦石」「鴛鴦曼陀羅」(現在も山科本圀寺の残存)などの項目があがっています。

本國寺(本圀寺)は、加藤清正(永禄五年(一五六二)〜慶長一六年(一六一一))の祈願所・菩提所であり、見開きのページの真ん中奥(五重塔の北側)に、加藤清正(浄池院)、夫人(清浄院)、娘(瑤林院)の石造の墓が並んでいることが描かれています。清正と夫人(正室)清浄院の間に生まれた八十姫(瑤林院)は、紀伊徳川頼宣の正室になり、紀伊二代目の徳川光貞を生んでいます(ちなみに光貞の子吉宗は、徳川八代将軍です)。この墓は、瑤林院が建立したといわれます。

天明の大火(天明八年(一七八八年))で堂宇・塔頭の大半を消失。徐々に復興してゆきますが(千木良礼子、平成一六年度日本建築学会近畿支部研究報告集 9003、九六九ページ(二〇〇四)参照)、五重塔と本堂は再建されませんでした。

明治始めの図面『寺地画図』は、江戸時代を通じておこなわれた復興の結果を、最終的に示しています。塔頭を含めた寺域は、北は松原通から南は(現在の)花屋町通まで。当時は、五条通も花屋町通もまだ開設されていませんが、概略をつかむために、色を変えて追加しておきました。図中で、「跡」としてあるのは、再建されなかったことをあらわしています。たとえば、「本堂跡」

きの報告書です。この平面図は、明治四年（一八七二）の『寺地画図』から塔頭部分を除いた地域（壇林・方丈・本圀寺境内）、つまり『都名所図会』（巻之二本圀寺の図）に描かれたのと同じ地域を描いています。これら、三つの図を比較すると、結局、本堂（もとは南面）はもとの位置に再建されず、方丈内の旧客殿（西面）がもとの位置から少し東寄りに再建されて、本堂として代用されたことがわかります。代用された本堂と清正廟の間に、立像堂が再建されています。この平面図から、人丸社は、「柿本社」として、もとの位置に再建されたと推測できます。清正門（明治四



本圀寺旧境内略図。

『重要文化財本圀寺経蔵（輪蔵）移築工事報告書』
建築研究協会編集、本圀寺、一九七九。
http://www.d1.dion.ne.jp/~s.minagawa/n_16_honkoku3.htm
よりえた図に堂宇名称など振り替え。）

年の図の四脚門）は、通称赤門（あるいは開運門）とよばれ、加藤清正が寄進した山門といわれています。

『新撰京都名所図会』四巻、竹内俊則、白川書院（一九六二）に、昭和期の本圀寺の俯瞰図（西南方向から）が載っています。この俯瞰図と『重要文化財本圀寺経蔵（輪蔵）移築工事報告書』の平面図とは、建物の配置がほぼ対応しています。

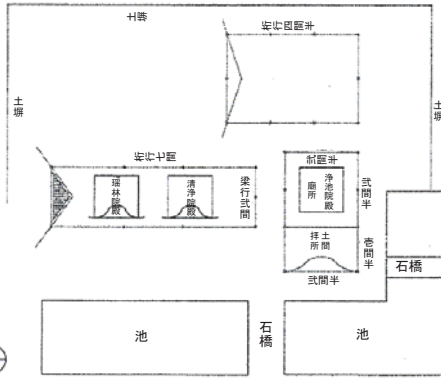
■ 清正廟の変遷

インターネットで「六条本圀寺」というホームページ（http://www.d1.dion.ne.jp/s.minagawa/n_16_honkoku3.htm）を見ましたら（このサイトは六条本圀寺関係の情報が豊富ですので、ぜひご覧ください。今回の記述は、多くをこのサイトの情報に負っています）、清正廟に関しておもしろい報告（千木良礼子「本圀寺清正堂の普請に関する研究」『田中家文書』を基本史料として）日本建築学会大会学術講演梗概集 2006、一三一ページ（北海道、二〇〇四）参照）がなされていることがわかりましたので、原報告に当たって概略を説明しましょう（筆者の個人的な感想がゆるされるなら、原報告の著者の所属（京都工芸繊維大学）は、定年まで筆者が勤務していた大学で、感慨深いものがあります）。

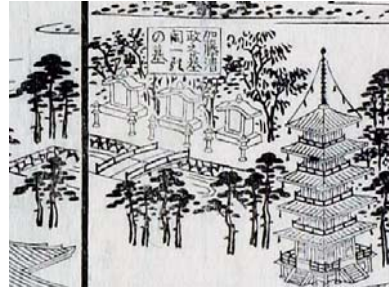
千木良論文の骨子は、

- 1 天保十一年（一八四〇）の「大光山御廟所別当・蛇目構、浄池院殿大神儀 御廟所并御拜所廻廊惣再建ニ付御寄進帳」（傍点筆者）などの田中家文書に「再建」の文字が見られるこ

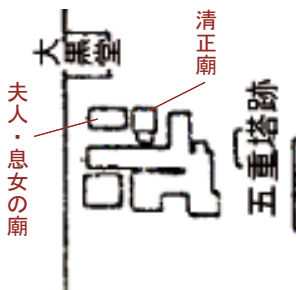
『普請願書』(一八五六)



『都名所図会』卷之二(一七八〇)



『寺地画図』(一八七二)



と。なお、淨池院は、加藤清正のこと。

2 安政三年(一八五六)の普請願書に、「乍^ラ恐奉^ル願^ヒ普請模様替^フ」という表題があり、大破したために改築したい旨の記載があること。

この論文では、「再^建」の表現を重くみて、清正堂の覆屋がすであつて、天明の大火(一七八八年)のときに類焼し、天保一年(一八四〇)になつてようやく再^建されたという前提にたつています。

本書で引用した『都名所図会』本圀寺の図(天明の大火直前)から切り取った清正・夫人・息女の墓の部分図を載せます。この図により、三基の石造の墓に覆^{おおい}屋はないことがわかります。したがつて、天保一年(一八四〇)史料による「再^建」が事実とすれば、天明の大火のあと、天保一年以前に、いつの頃か覆屋が付けられたことになり、さらには、天保一年の時点で覆屋が壊れていた(あるいはなくなっていた)ということになりますね。これは、不自然な感じがします。

上記「六条本圀寺」のホームページで指摘するように、天保一年(一八四〇)史料に見られる「再^建」の文字が、「清正廟にはもともと覆屋があり、天明の大火でほかの堂宇とともに類焼した」という当時の誤解(思い込み)に基づくのかも知れません。この推論によると、清正堂の覆屋は再^建ではなくて(もともと存在せず)、天保一年(一八四〇)になつて初めて作られたということになります。この説のほうか、納得がゆくように感じられますが、「当時の誤解である」のを実証することは、かなりむず

かしい。

安政三年（一八五六）の普請願書に付属する清正堂普請絵図（千木良論文から、説明文字を入れ替えて引用）には、北から、息女（瑶林院）と夫人（清浄院）の墓に共通の覆屋、加藤清正（浄池院）の墓には単独の覆屋を付ける図面が描かれています。『寺地画図』（二八七二）の清正廟の部分には何も説明がありませんが、切り取った部分図に、推定した清正廟などの説明を色を換えて入れておきました。『寺地画図』（一八七二）の部分図の図形（矩形と正方形）は、『普請願書』（二八五六）のレイアウトに沿って建てられていることを示しています。東側から南側に至る曲形の図形は、『都名所図会』や『普請願書』に描かれた池と同じとみなせるようです。

安政三年（一八五六）史料に「大破による改築」とあるからには、天保十一年（一八四〇）史料による再建（実は新築？）のあと、安政三年（一八五六）史料による再建までの十六年間に、覆屋が大破するような災害があったということになります（たとえば、嘉永七年（一八五四）一月と安政元年（一八五四）一二月に京都南部・伊賀大地震が起こっている、これが原因かもしれません。また台風なども可能性として考えられるでしょう）。

さらに昭和期の『新撰京都名所図会』（一九六二）の俯瞰図では、北側の二基の墓には覆屋はなく、覆屋としては清正堂のみが描かれています。経蔵移築図（一九七九）には、覆屋がないため夫人・息女の墓は描かれていませんので、色を変えて補っておきました。

清正廟は、山科の本圀寺に移されて（覆屋は、六条本圀寺の



経蔵移築図（一九七九）

『新撰京都名所図会』（一九六二）



ものと違うかもしれませんが、「清正宮」として現在も残っています。金びかの鳥居が目印です。

■ 猪熊通沿いの塔頭（子院）

往時を振り返るのはこのくらいにして、実際にこの近辺を歩いてみましょう。淳風小学校の北側に沿った通りを東に突き当たって、猪熊通北上することになります。この通りには、南から、了円院（了圓院）、勸持院、松陽院、林昌院、本妙院、松林院、智妙院、本実院（本實院）が並んでいます。いずれも、本圀寺が山科に移転したあとに残った塔頭。

勸持院（下京区猪熊通五条下ル柿本町）は、慶長期（一五九六〜一六一五）に加藤清正が壇越として建設、清正はこの寺から朝

勸持院



鮮へ出兵したといえます。向かって左の門柱には、「加藤清正公御宿院の寺」という木札が掲げてあります。右には、「安中山勸持院」と「詮量院寺務所」の木札。その足下に、「清正公」の石碑。天明の大火で類焼。その後再建しています。清正作といわれている枯山水庭園がありますが、普段は、非公開。そのほかに、清正の井や紀貫之を祭る福大明神祠。この社については、第17回「福神社」の紹介の中でもふれました。『拾遺都名所図会』巻一に

は、次のように説明されています。

福大明神社 ふくだいみやしろのやしろ 勸持院にあり。祭神紀貫之の霊にして、衣冠の木像なり。天文五年七月社辺焼失の時、神像を他家にうつしければ、時々怪異あり、再び当院にうつし、社を建てて安置す。上冷泉為村卿、殊に尊敬し給ひ、近年祠を修補し給ふ。

林昌院、松林院、本妙院の山門の写真をおきましよう。林昌院の傍らには、赤い鳥居の鎮守が祀られています。松林院では、門前に「南無妙法蓮華経」の題目碑。題目が蓮華の上に乗っています。

五条通から南へすぐのところにある本実院（本實院）と智妙院。続いて、猪熊通から五条通にでて西へ。今度は、一筋西の黒門通を南下します。ここに、町名看板「黒門通五条下ル柿本町」①が掲げられています。

■ 猪熊関白と柿本社

六条本圀寺の故地は、柿本町と呼ばれます。これは、『都名所図会』本圀寺図の左手奥にも描かれている「人丸社」ひとまるのやしろ（別名「柿本社」）に由来しています。本文の説明では、「人麿社」ひとまろのやしろ 方丈の庭にあり。尊氏公こゝに楼を建て観柳亭となづく」となっています。続編である『拾遺都名所図会』巻一では、「人麿社」の説明をさらに補充して、次のように説明しています。

ひとまろのやしろ 人麿社 方丈の北にあり。初は紀貫之の勸請なり。俊成

本妙院



林昌院



松林院



黒門通 五條 下ル 柿本町 ①



行く水の柳に淀む根をとへば
 いつかむかしの丸の塚
 尊氏

卿も亦尊信し給ひて、社を修補し給ふ。其後荒廃して一堆の塚のみ遺れり。これを人麿塚を号す。貞和元年当寺を鎌倉よりうつす時、足利尊氏公神祠を再営し給ひ、和歌を詠ず。

本実院



智妙院



『山城名跡巡行志』第一の「本國寺」の中に「人丸社」の項があり、

人丸社在三方丈北南向所祭柿本人丸紀貫之勸請其後為洪水亡社地殆世人云二人丸塚其後俊成卿再興

(書き下し文)

人丸社(方丈の北に在り。南向)。祭る所、柿本人丸(紀貫之、勸請す。其の後、洪水の為に、社地の殆どを失う。世人、人丸塚と云う。其の後、俊成卿、再興す)。

という記載があります。ただし、紀貫之の勸請や俊成卿の再興はあくまでも伝承とみなした方がよく、これらの記載を除いた部分が、実際に近いとみなすべきでしょう。

この「人丸社」(「柿本社」)の名残が、現在の町名「柿本町」に残っているのですが、「この地に柿本人麿を祭った神社を建てたのはだれだろう」という疑問は残ったままです。山科に移転した本圀寺には、旧柿本社の神像であった柿本人麿像が残っており、本圀寺創建以前からのものであると説明されています。気になるので、「本圀寺創建以前」というのを、ここで詮索しておきましょう。

現在の柿本町の一帯は、鎌倉初期に近衛家実(家實、治承三年(一一七九)〜仁治三年(一二四三))が、父近衛基通から伝領されて住んでいたところです。このため、近衛家実は、「猪熊(猪隈)殿」と呼ばれていました。

『山城名勝志』巻五の「猪熊殿」の記載は、

猪熊殿

六條北堀川西、○本國寺方丈北端有二御所跡、古堀跡残三千今、又柿本社在二同所、

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年(一七〇五)、『改定史籍集覽』二卷、近藤瓶城編、臨川書店(一九八四)、新加通記類第一八。

(書き下し文)

猪熊殿(六條の北、堀川の西。○本國寺方丈の北端に古御所の跡有り。古の堀の跡、今に残れり。又、柿本社、同所に在り。)

となっており、本圀寺(本國寺)が造営されるずっと以前は、近衛家の邸宅だったことが述べられています。

『山城名勝志』では、本圀寺(本國寺)の方丈の北端に、屋敷跡があり、古い堀のあとが残っているとしています。そして、同じ箇所に柿本社があると述べられています。したがって、『山城名勝志』は、はつきりとは述べていないものの、「猪熊殿に柿本社が祭られていたのではないか」と暗に匂わせています。しかし、暗に匂わせていることを、実証することは大変にむずかしい。ここでは、「猪熊殿」の周辺でおきたことを紹介して、お茶を濁しておきましょう。

『古今著聞集』に「天慶五年蕃客の戯れの例に依りて順徳院御位の時賭弓を御眞似の事」という説話があります。天皇の眞似をするという悪ふざけの一件を、熊野詣に出かけていた後鳥羽院(院政は建久九年(一一九八)から開始。承久の変で敗れて隠岐に流されたのが承久三年(一二二一年))から叱られてしまったという話です。観客として呼ばれた中に、

猪熊殿の關白におはしましける、光明峰寺の左大臣にてをはしましける。

『古今著聞集』卷第三(公事第四)一〇五、岩波古典文学体系八四(一九六六)

と記されています。猪熊殿こと近衛家実(治承三年(一一七九)仁治三年(一一二四三))が関白になったのは、元久三年(一一二〇六)。光明峰寺の入道殿は、九条道家(建久四年(一一九三)建長四年(一二五二))のことで、左大臣になったのは、建保六年(一二一八)です。

『増鏡』第二「新島もり」の中に、承久の変に至る直前の様子が次のように描写されていて、近衛家実と九条道家も登場します。

かやうのまぎれにて承久も三年になりぬ。四月二十日御門おりさせ給ふ。春宮四にならせ給ふにゆづり申させたまふ。近比皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき廿三日院號のさだめありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中の院と申し、父御門をば本院とぞ聞えさする。このほどは家實の大臣、關白にておはしつれど、御讓位の時左大臣道家の大臣攝政となりたまふ。かのあづまの若君の御父なり。

『水鏡・大鏡・今鏡・増鏡』、国民文庫刊行会(一九一〇)五五二ページ。

退位した御門とは、順徳天皇(第八四代、新院)。御兄の院とは、すでに退位している土御門天皇(第八三代、中の院)。父御門とは、すでに退位している後鳥羽天皇(第八二代、本院)。四歳に

なった春宮とは、即位して仲恭天皇(第八五代)。承久の変で敗れた後鳥羽上皇は隠岐へ流され、仲恭天皇は、わずか三箇月たらずで廃されてしまいます。

(現代語訳)

このようにいろいろな事件がありました。承久三年になりました。四月二十日に順徳天皇は退位され、四歳になられた皇太子に位をお譲りになりました。近頃は皆この年齢で即位なさるので、これもめでたい将来が約束されたというべきでしょう。同じ二十三日に、院号が定められ、今回ご退位になった方(順徳天皇)を新院とお呼びし、兄君の院(土御門上皇)を中の院と申し上げ、父君の院(後鳥羽上皇)を本院とお呼びすることになりました。このとき家實の大臣は関白でしたが、ご譲位のときに左大臣道家の大臣が、摂政にご就任なさいました。この方は、あの鎌倉の若君の父君です。

近衛家実は、承久の変前後、鎌倉幕府と朝廷の關係の修復に努めました。その事績よりも、むしろ『猪熊関白記』を残したこと有名。鎌倉時代初期の基礎史料として重要です。

『山城名勝志』は、『金剛佛子觀尊感身學正記』の弘安二年(一二七九)十一月廿六日(觀尊七十九歳)の条を次のように引用しています(振りがななどを補いました)。

依^リ殿下御^ノ請^ニ、參^リ猪熊殿^ニ、於^テ御堂^ニ入^リ見^參、奉^ル

授^ケ三五戒^ヲ、別受

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年（一七〇五）、『改定史籍集覽』二卷、近藤瓶城編、臨川書店（一九八四）、新加通記類第一八。

（書き下し文）

殿下^{でんか}の御請^{ごまがね}によりて、猪^みの熊殿^{くまどの}に参^{まゐ}り、御堂^{みだう}に於^おいて、見参^{けんざん}に入り、五戒^{ごかい}を授^{さず}け奉^{たてまつ}る。別受。

また、『感身學正記』の弘安七年（一二二八四）四月六日（叡尊八四歳）の条にも、「参^り猪熊殿^{いしぐまどの}」の記載があります。叡尊（建仁元年（一二〇一）〜正応三年（一二九〇））は、西大寺を拠点に真言律宗を広めた僧。鎌倉新仏教に対して、南都仏教（律宗）の革新を目差したものの。

弘安二年（一二七九）には、近衛基平（近衛家実の孫、寛元四年（一二二四六）〜文永五年（一二六八））はすでになく、長男の家基の代になっています。「殿下」とあるからには、摂政・関白ですが、家基はまだ関白になっていません（関白就任は正応二年（一二九三））。『感身學正記』が回想によつて執筆されたものですから、猪熊殿が家基である可能性はありますが、実際に誰が伝領していたかは判然としません。叡尊が授戒した人物は、家基かもしれませんし、別人である可能性も捨て切れません。叡尊が授戒した人物は、「別受」とわざわざ書いてありますから、出家の戒法を授けたのかもしれない。もしも、この仮定が正しいとすれば、別受を受けたのは、年代から考えて、近衛基平の次男であり、「猪熊一位入道」と呼ばれた近衛兼教（文永四年（一二六七）〜延元元年（一二三三六））の可能性があります。

上記の推定は、近衛家実―兼経―基平―家基（弟は兼教）の系統が、猪熊殿に住んでいたという前提に立っています。この中で、勅撰集に歌を残しているのは、基平と兼教。次に引用するのは、兼教の歌。

近衛関白かくれてのちこもりて年ひさしくはり侍りける

比^ひ、花の歌よみ侍りける中

春しらぬうき身もかなしいにしへに

つらねし枝の花に別れて

従一位兼教

新編国歌大観第一巻、角川書店、一九八三
詞書^{ことばがき}に出てくる近衛関白とは、父親の近衛基平のことでしょう。

蒙古来襲のときに返書をどうするかの一作で活躍した御仁ですが、二十代前半で疫病で死亡しました。二〇〇一年のNHK大河ドラマ「北条時宗」では切腹したことになっていますが、劇的效果を上げるためにだけに史実を曲げるのはどうかと感じます。若くしてなくなりましたが、十歳から書き始めた『深心院関白記』を残していることや、歌人としても有名です。

筆者の目論見は、「猪熊殿にかかわりのある、和歌に長じた人の中に、柿本人麿を祭った祠を建てた人がいるに違いないので、それを探してみよう」というものでした。ここまで調べましたが、これ以上の史料が見つからず、お手上げです。誰が建てたかは特定できませんが、鎌倉時代、猪熊殿に人丸社（柿本社）があつたが、その後荒廃していたのを、室町時代始めに本國寺ができたときに再興して境内に取り込んだという筋書きは確かです。この人丸社（柿本社）の名残^{なごり}が、現在も柿本町という町名に残っ

ているのですから、京都の奥深さはたいしたものなのです。

■ 旧堀川沿い

冒頭の「南無妙法蓮華經」の題目碑のところに戻って、今度は、淳風小学校の南側、花屋町通を辿ることにしましょう。花屋町通のこの部分は、明治一五年（一八八二）に新設された道路です。本シリーズ第14回で詳しく述べたように、開通の記念のために「新開道路碑」が建っています。

花屋町堀川の西北の角は、旧堀川（今は堀川通西側の歩道下の暗渠）の流路に沿って歩道が曲がっています。疲れてしまったので、一休み。折良く西本願寺の宿泊施設「聞法もんぽう会館」がありますので、ロビーの喫茶で抹茶を一杯。菓子が付いています（門徒でなくとも利用できます）。

甘いもので元気が出たので、もう一歩き。聞法会館の出ですぐ北、堀川通西側歩道脇の植え込みの中。ほぼ六条通の延長上に、「従是南六条御境内」という道標が建っています。六条御境内というのは、西本願寺の境内のこと。駒札の本文は正確には判読できませんが、西本願寺がこの地を寄進された由来が書かれているようです。その末尾に、「堀川改修工事にあたり発掘。昭和五九年七月七日」とあります。

ところで、現在この道標が建っているのは堀川の西岸ですから、本圀寺裏の真ん中あたりに当たります。表記通り西本願寺の境内というのならば、どうも位置がおかしい。この道標のすぐ北側に、第2回の後半で紹介した「左女牛井之跡」の碑がありま



「従是南六条御境内」の碑

す。この碑も堀川の東岸に設置すべきものですから、同様に「従是南六条御境内」の道標も、もともとは堀川の東岸に設置したあつたと考えると辻褄があいいます。醒ヶ井通（現在、は堀川通に吸収されている）に西面する片側町として元日町がんじつちょうがありますが、かつては西本願寺寺内町でした。この寺内町の北辺に、この道標が設置してあつたと考えても無理ではないでしょう。

■ 五条通より北の旧本圀寺内

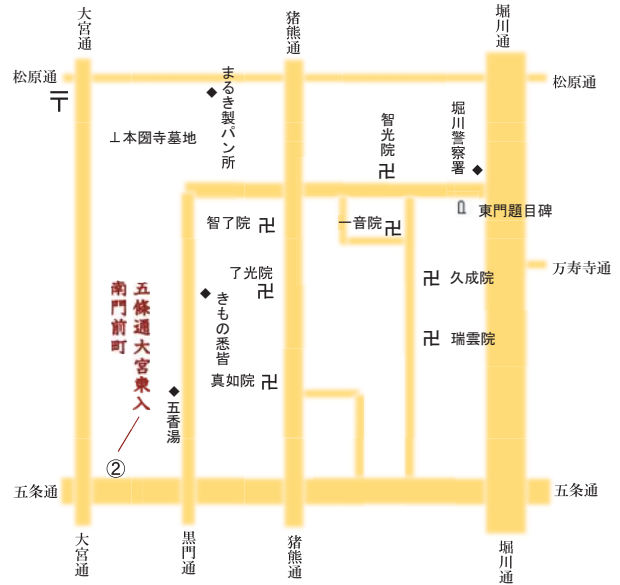
本圀寺の境内は、五条通ができたために、南北に分かれてしまいました。今度は、五条通より北の部分歩いてみましょう。

まず、五条大宮の交差点から少し東に歩いたところに、「五條通大宮東入南門前町」②の看板を見つけました。してみると、仁丹看板を取り付けた時点（明治終わりから大正時代にかけてとお

もわれる)では、すでに五条通が開設されていたということになります。上で引用した明治四年(一八七二)の『寺地画図』では、この部分の五条通は開設されていませんので、いつ頃開設されたのだろうかということが気になりました。

第18回では、豆之子稲荷や諏訪神社の近辺を説明するために、『京都指掌圖文久改正』(一八六二年)を引用して、その部分図を使いました。念のために、東北の地域を再び日文研のホームページ

町名看板の所在(旧本圀寺付近・五条通より北)



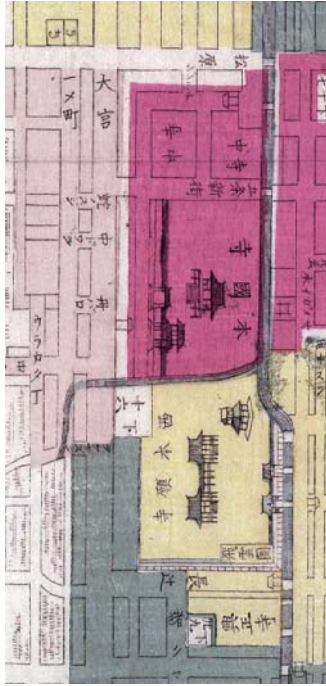
シ (<http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/images/002813426.html>) から引用しましょう。もちろん、この図では、明治四年(一八七二)の『寺地画図』と同様に五条通はありません。なお、この図の右半分が赤く塗られているところは、元治元年(一八六四)七月蛤御門の変(禁門の変)によるどんでん焼で焼失した地域を示しています。

次に示すのが、肝心の古地図。日文研のホームページ (<http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/images/17.html>) から、明治十一年(一八七八)の『精撰増補京都詳細図』の本圀寺付近を切り取って示します。ちなみに、この地図は、当時の行政区が四色(黄色・灰色・ピンク・マゼンタ)で色分けされていますが、マゼンタ色

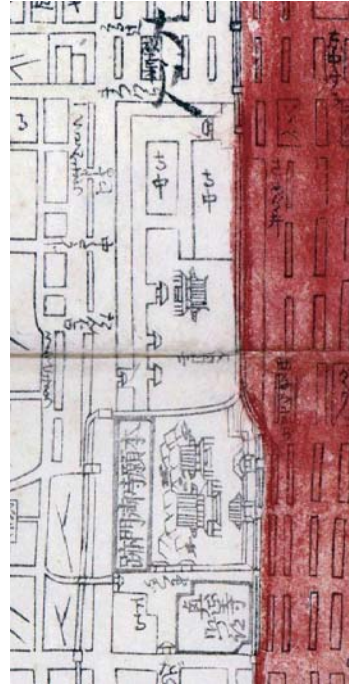
ごじょうどおり
五條通 大宮 東入 南門前町 ②



『精撰増補京都詳細図』（一八七八年）の本圀寺付近
 （国際日本文化センター「地図データベース」より、
 一部を切り取り加工）



『京都指掌圖文久改正』（一八六二年）の本圀寺付近



で示されたところが下京第一七区で、その堀川以西（旧六条本圀寺の寺内）が柿本町です。マゼンタ色のところをよく見ると「五条新街」との書き込みがあり、この時点で五条通が開通していることが示されています。したがって、明治四年（一八七一）から明治十一年（一八七八）の間に五条通が開通したことが判明したわけです。しかも五条新街とありますから、明治一〇年（一八七七）頃に通じたといっておいてまちがいはないでしょう。

なお、並べた二つの図では、本圀寺と西本願寺の間には、堀川から分岐した水路が流れています。この水路のところに、花屋町通がつくられたことは、第14回で述べた通りです。したがって、花屋町の開通を記念した「新開道路碑」（明治十五年（一八八二設置）では、「下京の市街、東西に達し直通するは、四条なり、松原なり、五条なり、七条なり。」として、東西の通りを列挙した中に、開通したての五条通があげられています。

■ 本圀寺と朝鮮通信使

五条通から北へ猪熊通に入ると、そこは旧六条本圀寺の塔頭が並んでいます。真如院（眞如院）、了光院、智了院。万寿寺通（の延長）との十字路にです。西北の一角は、六条本圀寺があつたときから続いている墓地も、今では市街地の中。市街地としては不釣り合いくらいに広い一角を占めています。万寿寺通に沿って北側に、智光院。その南の地域には、一音院、久成院、瑞雲院。万寿寺通を東へ、堀川通に出る直前に、本圀寺東門跡の題目碑。ちょうど、堀川警察署（下京区堀川通松原下ル柿本町）の南



本圀寺題目碑（東門跡）



駒札

に当たります。題目碑の傍らの駒札には、本圀寺が朝鮮通信使の宿舎になっていたことが説明されています。江戸時代には十二回来日していますが、これだけ続いたのには、日朝双方にメリットがあつたのでしょうか。徳川幕府を日本の正統政権であることを認めさせるために、日本側（江戸幕府側）にメリットがあつたということ。たとえば、京都に宿泊しながら天皇とは会見していないという事実。朝鮮側にとっては、清国と日本にはさまれた国としての安全保障。

京都府立総合資料館のメルマガコラムが発信されています。
<http://www.pref.kyoto.jp/kaidai/maga-k.html>では、「京の風景（江戸時代編）」vol.5と題した京都府立大学・総合資料館共同研究「正徳元年諸事日記」（古久保家文書より）の解説。町代（下西陣組）として京都町奉行所との連絡に当たった古久保家の公務

日記です。具合のよいことに、朝鮮通信使関係の記事が解説されています。

正徳元年（一七一二）に徳川家宣將軍襲職の祝賀ため来日した朝鮮通信使は、総勢五百名（内二二九名は、帰路の船の整備のため大阪に残留）。十二月四日から八日まで六条本圀寺に滞在しました。京都での行事が終わったあとのお触れに関する記事です（振りがなは、筆者が現代かな遣いで付けたもの）。

十二月九日朝鮮人二付、三条通四条通、札共
 取入置候分 并 牛馬杭 義も、前之通立置候様
 二と町々へ申渡候様二と新家方より被二仰渡候

新家方とは、京都町奉行所で土地・道路管理をおこなった職務。外国からの賓客を受け入れるために、立て看板や牛馬を繋ぐ杭を一時的に取り除くなど、町中をこぎれいに片づけたことがわかりますね。

■ 名水と名石

堀川の東岸には、有名な「左女牛井」がありました（第2回参照）。同じ水系ですから当然のこと、対岸の六条本圀寺にも、たくさんのお水が湧き出ていました。拾遺名所図絵一巻に記載があるものは、「亀井」（本圀寺内、本堂の西）、「鶴井」（本圀寺多門院内、織田有楽齋茶の湯に可なりとてこれを賞す）、「松蔭井」（本圀寺持珠院内）、「真如水」（本圀寺真如院内、寺号この井よりおこる）です。真如院は、もともとは岩上通五条上ル西側にありま



真如院

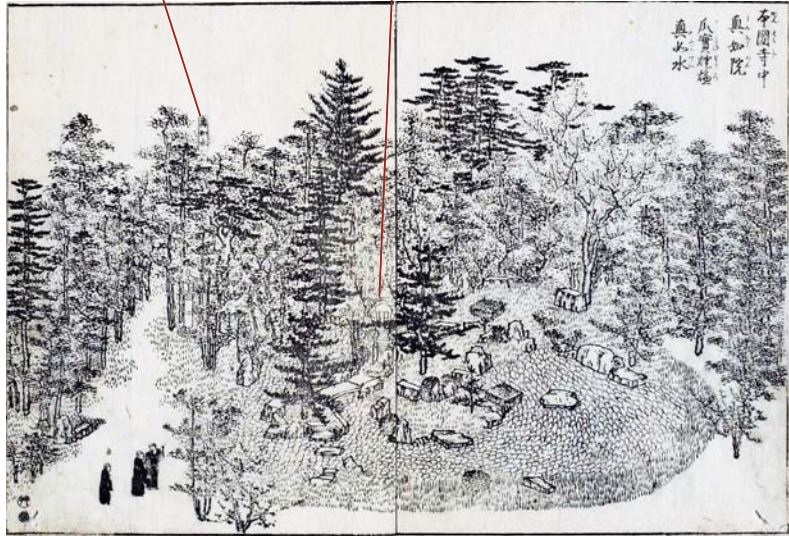
したが、昭和二四年（一九四九）に隣接していた明德高校（現在は西京区へ移転）の拡張にともない、持珠院跡に移転しましたので、真如水がどうなっているかはわかりません。残念ながら、そのほかの名水も現在ではなくなっているようです。

真如院（下京区猪熊通五条上ル柿本町）については、枯山水庭園が有名です。板状の石を鱗状に敷き詰めて、川の流れを表現しているところが特徴。『都林泉名所図会』巻一に挿絵がありますので、引用しましょう。挿絵の見開きページの境目、垂直中ほどに「瓜実實燈籠」の短冊があり、その下に、燈籠の図が載っています。

現在の庭園は、真如院が現在地に移転したあと、昭和三六年

瓜実燈籠

真如水



『都林泉名所図会』巻之一（寛政一一年（一七九九）真如院の図。

（国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用）

〔二九六一〕に、残った石組などを使って、この挿絵を参考にして復元されたものです。作庭は重森三玲。通常は非公開ですが、最近ほぼ毎年特別拝観があるようです（平成二十二年〔二〇一〇〕は、一〇月二十九日～十一月三日に特別公開の予定）。

『拾遺都名所図会』巻一には、真如院に烏帽子の形に似た烏帽子石があるとの記載があり、この石と足利義昭との因縁を述べています。さらには、『都林泉名所図会』巻一では、足利義昭が烏帽子をかけたことに話が変わっており、烏帽子掛石という名前で、挿絵が掲載されています。この石は、瓜実燈籠などとともに、今も真如院に伝わっているようです。

■ 狂言「宗論」

狂言の「宗論」にも「本国寺」の僧が出てきます（『狂言記』（万治三年〔一六六〇〕）新日本古典文学大系五八、岩波書店（一九九六））。宗論とは、仏教の宗派間でおこなわれる宗義上の討論・論争のこと。狂言の「宗論」のあらすじを紹介しましょう。

妙法蓮華經 法華經の經の字をぎやうせんとは人の思
 ふうらん 「罷出たるは都本圀寺の坊主で御ざる、此度思
 ひ立、甲斐の身延を参詣致し、唯今下向道で御ざる。」
 と登場した法華僧と

南無阿弥陀仏の六の字を むつかしく人や思ふうらん
 「罷出たるは東山黒谷の愚僧で御ざる、信濃国善光寺へ
 参り、唯今下向道で御ざる。」

と登場した浄土僧が同道することになります。宿に着いて、宗論を始めます。最初は、なんとかして相手を説き伏せようとしませんが、そこは狂言のこと、双方とも野菜にかこつけた滑稽な論を展開します。浄土僧が一遍上人の踊り念仏を思い出して、「南もうだく」と名号を唱えて踊り念仏を始めますと、法華僧も負けじと「蓮華経」と題目を唱え始めます。そのうちにこんがらがって、双方が名号と題目を取り違えてしまいます。双方「是はいかな事、取違えてのけた」と動転してしまいます。そして下げは、「法華・阿弥陀・観世音はいずれも釈迦が成り変わった姿であるから隔てがない。双方の名前を時宗の法号風に妙阿弥陀仏としなさい」と。「宗論はどちらが負けても釈迦の恥」と川柳にもあります。落語の「宗論」は、この話を現代風に換骨奪胎して、浄土真宗の親とキリスト教の息子に置き換えていておもしろい。こちらの下げはいろいろですが、「宗論はどちらが負けても神（仏）の恥」とゆかないところがむずかしい（神あるいは仏に共通認識がないためです）。

■ 松原通のこのあたり

このあたりの松原通は、堀川通の拡幅で分断された形になっていますが、もともと第3回で紹介した松原京極商店街のつづきです。南側に、まるき製パン所。レトロな看板が目印。ハムロールやハムエッグなどのほかに、コッペパンに餡が入ったあんパン。写真を撮っている間も、女子学生、主婦などがひっきりなしに店を訪れていました。

まるき製パン所



松原通のこのあたり



ついでに、銭湯「五香湯」（黒門通五条上ル柿本町）。「五香湯」は、漢方の有名な配合です。それかあらぬか、塩風呂、泡風呂、薬風呂、水風呂、サウナの五種を銭湯料金で楽しめるそうです。そこから少し北へ進んだところに、「きもの悉皆」の暖簾。「悉皆」が珍しいので、写真をとりました。「悉皆屋」は「よろずや」の意で、着物に関する誂え、しみ抜き、洗い張り、柄足し、染め替えなど、よろずのことを受け持つ職業です。

五香湯



きもの悉皆





プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第20回）2010/07/21

© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 <http://xyntex.com>